



こどもたちと卒園児、地域をつなぐ保育 まあれ愛恵会

埼玉県を中心に、東京都や神奈川県で複数の保育園を運営する社会福祉法人まあれ愛恵会。こども一人ひとりの個性を尊重し、家庭的な雰囲気の中で自ら育つ力を引き出す保育を行い、地域に親しまれる園づくりを目指しています。

そんなまあれ愛恵会の保育には、一体どのような特徴があるのでしょうか。海田英彦理事長に、保育の特徴や園の取り組みなどを伺いました。

家庭的な雰囲気の保育

— 「家庭的な雰囲気の保育」を掲げられていますが、どのような特徴があるのでしょうか？

海田理事長 まあれ愛恵会では大規模な保育園はあえてつくらず、各園の定員は30名から多くても90名程度です。そのため、どの園でも保育士全員がすべてのこどもと関わる機会があり、自然と距離が近くなるのが特徴です。異年齢保育も取り入れており、どの先生もこども一人ひとりのことをよく理解したうえで関われる体制が整っています。

こどもたちに自然体験や伝統を

— ホームページで、田植え体験などの自然体験を実施していると拝見しました。

海田理事長 今のこどもたちは、ゲームや映像、さまざまな情報に囲まれて育っていて、その分、情報を受け取って処理する力はとても高いと感じています。正直、私よりも上手にこなしていることも多いです。

一方で「ゼロからイチを生み出す力」は、これから育てていくべきものかと思っています。私たちがこどもの頃は、石ころひとつからでも遊びを生み出すような体験がたくさんありました

が、今のこどもたちにはそういった環境が少なくなっています。

自然の中には、計画通りにいかないことも少なくありません。たとえば、台風が来て稲が倒れるかもしれない。そんなときに「じゃあどうしようか？」と考える経験は、こどもたちに「できない理由」ではなく、「どうしたらできるか」を考える力を育ててくれます。

都市部では自然と触れ合う機会が減ってきているからこそ、意識して取り入れていきたいですね。たとえば、5歳児クラスでは自然の中で遊びや学びを展開する取り組みも行っています。身の回りにあるもので遊びを工夫する、収穫した野菜で昼食をつくる、かまどでご飯を炊く、ドラム缶風呂に入るなど、五感を使った豊かな体験ができるよう工夫しています。

— 昔に比べると自然の中で遊ぶ機会が減っている中、とても貴重な取り組みですね。

海田理事長 保護者の方と一緒に自然にふれる機会もつくっており、たとえば稲刈りの前には田んぼにいる水生生物と一緒に探したりしています。今の生活の中で、大人でも田んぼに入るような経験はなかなかありませんよね。卒園式の際に「初めて田んぼに入ったけど、こどもと一緒に泥だらけになって本当にいい思い出になりました」と話してくださる保護者の方も多いです。

地域から愛される保育園

こどもや保護者だけでなく、地域との関わりも大切にしているまあれ愛恵会。園の中だけにとどまらず、さまざまな世代との交流を通して、地域に根ざした保育を実践しています。

地域との関わりを大事に

— 地域とのつながりや関わり方について教えていただけますか。

海田理事長 保育園は、園の中だけで完結するものではなく、地域の中で存在していると考えています。たとえば、こどもたちは登園時に地域の方とすれ違ったり、小学生とあいさつを交わしたりと、日々の生活の中で地域との関わりを自然に経験しています。

そのような環境にあるからこそ、私たちも地域の一員として、積極的に関わりをもつ姿勢が大切だと捉えています。中学生の職場体験の受け入れを行ったり、小学生の町探検でのインタビュー対応をしたりするのもその一環です。



以前に職場体験で来園した中学生が、のちに保育士資格を取得し、なんと現在はまあれ愛恵会で保育士として働いています。職場体験から十数年が経っての再会でしたが、とても嬉しいことです。このように、どこでどのような出会いが将来につながるかはわかりません。地域との関係は一つひとつを大切に、丁寧に積み重ねていくことが大切だと考えています。

卒園後もずっとつながる

— 卒園児との関わり方についても伺っていて良いでしょうか？

海田理事長 卒園した子どもたちにとって、卒園後も困ったときにふらっと立ち寄って相談できる場でありたいという思いから、継続的に園とつながれる機会を設けています。

たとえば、小学校の入学式が終わったタイミングでランドセル姿を見せに来てくれたり、7月には夏祭りに招待、10月の運動会にも顔を出してくれる子がいたりします。友達同士で誘い合って来てくれることも多いです。先日も「成人式で保育園の仲間と集まった」と報告しに来てくれた卒園児がいて、とてもうれしく思いました。卒園児を対象に、各園ごとの開園10周年にあわせてデイクャンプも開催しています。多いときには100人ほどの卒園児が集まることもありました。

園を思い出の場所にするだけでなく、成長してからも立ち寄れる居場所としてあり続けたいという気持ちで、節目ごとに卒園児と再会できる取り組みを続けています。



— 先生たちにとって、まあれ愛恵会はどのような場所なのでしょうか？

山本園長 先生たちからは「こどもの成長の節目に立ち会えることが大きな喜び」だという声をよく聞きます。当園は行事が多いのですが、日々の保育では見えにくかった一人ひとりの成長が、行事を通してぐっと見えてくることがあります。そのような瞬間に関われることが、保育士としてのやりがいにつながっているのだと思います。

私自身も、先生たちがこどもの成長をうれしそうに話してくれることに喜びを感じます。

海田理事長 職員には「楽しく・一生懸命・わくわく働こう」と伝えています。「楽しい」と感じられるかどうかは、同じ出来事に対しても自分の気持ち次第で変わるものですし、「一生懸命」は他者と比較する必要はなく、自分なりの姿勢で構わないと考えています。そして「わくわく」は、未来を想像する中で生まれる感情です。たとえば、子どもたちがどのように育っていくのかを想像するときに芽生えるものであり、大切にしてほしい感覚です。

保育は子どもたちの未来に関わる、本当に意義深い仕事です。だからこそ、こうした前向きな気持ちを持って、日々の保育に取り組んでほしいと願っています。

まあれ愛恵会では、医療的ケア児の受け入れも行っています。ここからは海田理事長に加え、実際に医療的ケアを行っている南与野たいよう保育園の山本悠里園長先生も交えて、お話を伺いました。

医療的ケア児の受け入れ

— 医療的ケア児の受け入れを始めたきっかけについて教えてくださいか？

海田理事長 これまで医療的ケアが必要な子どもたちは、保育園に入ること自体が難しい状況が続いていました。たとえば、経管栄養が必要な子や、気管の形成が未熟で医療的管理が必要な子などは、自宅保育となることが多いです。

このようなご家庭に対して、私たちが保育の面から手助けできるならと、大学病院の小児科看護師としての勤務経験がある山本園長を迎え入れ、医療的ケア児の受け入れをスタートしました。当初1園から始めた取り組みが、4年目を迎えた今では4園に広がっています。

保護者の方が働きに出られることで、リフレッシュできたり、気持ちに余裕を持って子育てと向き合えたりと、家庭にとっての大きな支えにもなっていると感じており、この取り組みを始めて本当によかったと実感しています。

— 昔に実際に医療的ケア児を受け入れてみて、ど

のような変化がありましたか？

山本園長 現在、医療的ケア児は2・3・4歳の各年齢に在籍していますが、同じクラスで生活をともにする中で、周囲の子どもたちにも明らかな変化が見られるようになりました。

発達のペースに違いがあることは自然なこととして受け止めながら、こどもたちが自発的に手伝おう、声をかけてあげようと行動する姿が増えてきています。そばに寄り添い、手を差し伸べるなど、思いやりの気持ちが日々の中で育っているのを感じます。

医療的ケア児本人にとっても、同年齢のこどもたちと関わりながら過ごせる環境はとても貴重です。家庭だけではなかなかできない経験ができることに対して、保護者の方からも感謝の声を多くいただいています。

「保育園に通うようになってから、今まで見たことがなかった笑顔やしぐさが見られるようになった」というお話もよくいただきます。日々の成長が目に見えて感じられることが、私たちにとっても大きな励みになっています。

待機児童問題の新たな打ち手

— 待機児童対策の一環として、新たな取り組みをされているとお聞きました。

海田理事長 さいたま市の取り組みとして「定期保育」という制度があります。保育園では、0・1・2歳児

の入園希望が多い一方、5歳児は定員に空きが出ることがあります。その空いている保育室を活用し、1歳児の待機児童を一時的に（最長2年間）受け入れる形で運用するのがこの取り組みです。1歳・2歳という保育が特に必要とされる時期に枠が用意されることは、保護者の方にとって大きな安心材料にもなっていると感じています。

— 画期的な取り組みですね。

海田理事長 さいたま市ではこの定期保育の制度を比較的早い段階から導入していました。「こうした制度があるなら、ほかの自治体でもぜひ活用したい」と提案したところ、導入が進んだ自治体もあります。こうした取り組みは、行政との連携があってこそ実現できる部分も大きいので、やはり自治体との協力体制は非常に重要だと感じています。



こども一人ひとりを尊重する丁寧な関わりと、自然体験や地域とのつながりを大切にしたい、温かく実践的な保育をされているのが印象的でした。

「楽しく・一生懸命・わくわく働こう」というメッセージのもと、先生たち自身が前向きに働ける環境づくりを大切にされている雰囲気も魅力だと感じました。